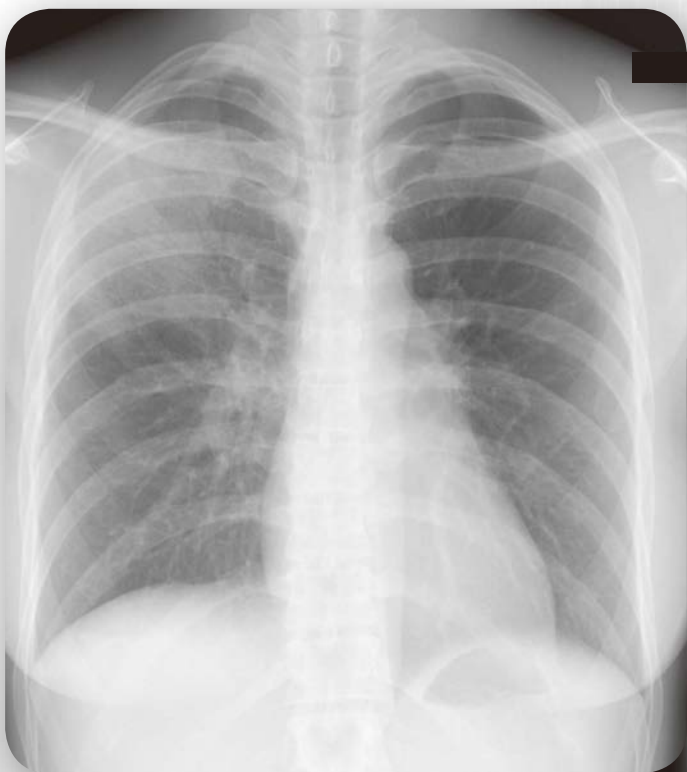


特 集

CT・MRI時代の単純X線



(写真：p20, 54, 91より)

写真:いつ撮る? どう読む?

序説

本誌編集委員の栗井和夫先生からのご依頼によりguest editorとしてこの特集号を企画させていただいた。

CT, MRIの撮像件数の増加に伴い, その読影に多くの施設の放射線科診断医は忙殺されている。画像診断管理加算の存在自体がそれに拍車をかけているのかもしれない。従って, 胸部単純X線写真の読影は多くの施設では行われていないのが現状である。しかし, 病院では, CT, MRIの撮像件数の増加にもかかわらず, 単純X線写真は, 日常の診療においてルーチンとして撮像されており, その件数は減っていない。その多くは主治医により確認されているが, そのなかには適切な読影がなされぬままPACSのサーバーに画像のみが蓄積されているものも多くある。これは, 患者にとっては不幸なことであり, 可能ならばなんらかのかたちで放射線科医がこれらの診断にも関与したいところである。現状では困難でも, 将来AIを駆使することによって, 放射線科医の関与が増えればと思うし, あるいは, CT・MRI時代において, 単純X線写真の適応を, 再度, 臨床医と考え直してもいいかもしれない。

しかし, そのような難しいことを考えなくても, 放射線科診断医として, 少なくとも代表的な疾患の単純X線像については知っておくべきでは? というのが筆者の本音であるし, この企画の意味するところである。下世話に言えば, 骨軟部腫瘍の難しい分類やMRI所見を熟知していても, 骨膜反応のX線画像はみたことがない, というのでは少し具合が悪いのでは? ということである。

執筆は, 呼吸器, 循環器, 小児, 骨軟部各領域の真の意味での新進気鋭のエキスパートをお願いした。また, 今話題のAIの活用についてもご依頼させていただいた。執筆者の先生方には, ご多忙中のなか, 素晴らしい原稿を頂戴し, 編者としてこれに勝る喜びはない。この特集号をきっかけに1人でも若い放射線科医が単純X線写真の奥深さに気付いていただければ幸いである。なお, 単純X線写真が有用な領域は, ほかに, 頭頸部, 腹部, 救急, ICUなどがあるが, 今回は誌面の都合でこれらは割愛させていただいた。どうかご了解いただきたい。

高橋雅士